



TITLE:

<書評リプライ>村津蘭氏へのリプライ

AUTHOR(S):

吉田, 優貴

CITATION:

吉田, 優貴. <書評リプライ>村津蘭氏へのリプライ. コンタクト・ゾーン
2019, 11(2019): 526-529

ISSUE DATE:

2019-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/244008>

RIGHT:

村津蘭氏へのリプライ

吉田優貴*

1 まずは御礼

我ながら頼まれても書評したいと思わない類の拙著を、深く読み込んでいただいたうえでこうしてご自身の言葉で丁寧に論評していただき、心より御礼申し上げます。

「書評をしたくない類」とは、レビューとしてまとめることが難儀であるという意味である。常に思考が四方八方に散乱しがちな状態にあり、それでは困るから章・ダイアログごとに「書きたいこと」「書くべきこと」のエッセンスをネタ帳に書き連ねながら本書を作成した。その当の本人ですら、今年1月に開催された研究会¹での「自著紹介」の機会にレビューし損ね、これまでの私の口頭発表の中でも黒歴史に残る散々な結果になったくらいだ。

村津氏の書評は、著者自身が意図して書いたはずなのにふたたびすっかり忘れていたことを思い出させてくれた。特に、「章」と「ダイアログ」の関係である。このダイアログは、本書のベースにある博士論文で「エピソード」としてすべての章の最後にまとめて記述した²。審査の際、「エピソード」の位置づけについて問われたとき、私は持っていた答えを忘れはつきりと答えられなかった（なお、博論審査後、「ダイアログ」の「章」との関係を最初に思い出させてくださったのは風響社の石井雅氏であり、出版助成を申請する際に各章の「カウンターパート」という表現を提案してくださった）。

本書の索引の人名欄には、学术界の著名人がほとんど登場しない。代わりに登場するのは、私がフィールドで出会った聾の子供らを含む「無名の」人々であり、人物からフィールドでの出来事をたどることも可能である（自分で仕掛けたことはいくつもあるが、私は自分でつくっておいた道に迷ってしまいがちだ）。

また、各章は画像を多用しているが、実はダイアログの方が私にとっては「ヴィジュアル」な位置づけにある。「ヴィジュアル」といっても「見る」とどまらない身体経験である。こうしたことをしっかり読み込み、感じとってくださったことに感謝申し上げます。

*YOSHIDA Yutaka 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 研究機関研究員
araawet@gmail.com

1 AA 研で2019年1月13日に開催されたワークショップ「「危機」にふれる——レバノンとケニアのフィールドをめぐるふたつの著作から」。2019年度中に冊子化・Web公開予定。

2 <http://www.soc.hit-u.ac.jp/research/archives/doctor/?choice=exam&tthesisID=294>

2 方法をめぐる不自由

2-1 技術的課題

村津氏は「本書のイメージを「民族誌的だまし絵として実践」するには、読者として多少の困難があった」と控えめに指摘してくださった。これは別の人からもっと辛辣な言葉で批判されたことだ。「好き勝手に見ろと言っている割には、好き勝手に見せてもらえない。こういう書き方は傲慢ではないか」というように。

確かに大上段に構えた物言いをした割には、中身が伴っていないという批判は免れない。その大きな要因は、「どう見られるか」をめぐって私自身が十分に研究・実践できていないことにある。過去に、映像が「どう見られるか」についての議論は置き去りにされがちだと指摘したことはあるが〔古川（＝吉田）2011〕、具体的な解決法を見出したわけではない。

村津氏が指摘したとおり、「民族誌的だまし絵」は、(1)「高度な技術」や「(映像そのものにある)躍動的なシーン」によって支えられるものであろうし、(2)キャプションのありようによって制限されてしまうものであろう。ただ、これらの課題は、村津氏の主張する「イメージ自体の力」、すなわちモノとしての画像の質や映像を扱ううえでの私の腕の話にだけ還元できることではない。私自身の「見る」という経験自体が何だったのかという本書の議論の根幹に関わってくることだ。

(1)についてはまず、私がケニアで見た日常生活そのものが決して高解像度でも劇的でもなく、よく見ろと言われても見過ごしてしまいがちでつかみどころのないものだったということを改めて強調しなければならない。私はつかみどころのない日々の営みのつかみどころのなさに目を向けたかったし、読者の方々に目を向けてもらいたかった（おそらくこの物言いが「傲慢」なのだろう）。だから、本書に掲載された画像が粗いこと自体意味のあることで、もっといえば粗くなければいけなかった。

また、方法は内容とワンセットであるため、内容について、土田まどか氏による書評を引用しつつここで述べさせていただく。本書の議論の「出発点は「…ない／なかった」という経験」〔土田 2018: 497〕であり、本書が「出発したまま決して着地していない」〔土田 2018: 497〕のは、日々の営みのつかみどころのなさを描こうとするとき、つかんだフリをした瞬間に全て台無しになってしまうと、少なくとも本書作成当時は固く信じていたからだ。「着地しない」描き方が、結論なのである。もちろんこの主張は私の専売特許ではなく、「それでもなお、暫定的な結論を明示すべき」であったかもしれない。だが、はっきりとした主張がありつつも、書けば書くほど沸き起こる私自身に対する疑いを最後まで振り払うことができなかった。その自信のなさが、読者の方々へ「見る自由」を要請しつつ「不自由」を強いた大きな要因だったと今は思う³。

3 とりわけ本書作成中の私の日常生活では、「躍ること」を制限されつづけていた。対話をしたいと言いながら、日常生活では自らを閉ざさざるを得なかったことが本書の文章の運びに少なからず影響していたと思う。そうした生活から脱し始めた今なら、別の描き方ができるかもしれない。

(2) については、画像を用いるときにキャプションを付すことが半ば自動的に求められるというような制度的課題があることも否定できないが、何よりも私自身が（映像と文字をバランスよく用いている）幅広い分野の実践現場に足を運び、感知する経験を積んでいくしかなく、今後も探究していきたいことである。「見せることと見られること」、「書くことと読まれること」、「見せることと書くこと」、「見られることと読まれること」は、一筋縄ではいかない。

村津氏に最後に指摘されたことは、「なぜ元々動画であったものを、静止面に切り出す必要があったのか」ということだ。これもまた、制度上の課題だけではない。私は、2007年から2009年頃までの間、コラージュ動画を5本作成した。作成したコラージュ動画を口頭発表で投影したこともたびたびある。しかし、やはり「見せることと見られること」に関して課題は増えるいっぽうで、博士論文では動画で表現することを自分の意思でやめた。「動画であれば文字で表現できないことも表現できるのではないか」という幻想に取り憑かれ負けてしまう気がしたからだ。結果、文字と画像（順不同）の組み合わせでどれだけ伝わるか、その勝負に出たというわけだ（対話は勝ち負けではないけれど）。

ただ、こうした指摘を受けると、別のアプローチもあるのではないかと気づかされる。ケニアの人々との経験がいかなるものだったのか、「撮る」という行為を通して残った動画を、たとえば相手との距離、どこにフォーカスしているのか、いつのどの時点で撮ったのか、私はいつどのように動いていたのかという観点で分析すると、私が見過ぎていた別の「気づきの過程」が浮き上がるかもしれない。そのときは、動画を積極的に使用することになるであろう。

2-2 制度的課題

村津氏は「映像人類学を標榜しなくとも映像が重要な意味を持つ民族誌も増えてくるはず」と指摘しつつ、制度上の課題にも切り込んで論評してくださった。いま、カメラを持たずにフィールドワークに出かける人類学者はほとんどいないはずだ（深い考えに基づいてカメラを持ち込むのをやめたという人も知っているが稀な例である）。が、どういうわけか日本では、あたかも「映像人類学」が、ともすれば人類学者とは別の専門家集団によって営まれる「独立した分野」であるかのように受け止められることさえある。

海外の論文誌に右へ倣えをすべきだと主張するつもりはないが、たとえば *American Anthropologist* では、Film Review のセクションが、今から50年以上前の1965年2月号よりスタートしている。冒頭には「この新しいセクションでは、最近制作され既に利用可能な状態にある教育・研究目的で使用される動画 (*motion pictures*) について論評する」と明記されている⁴。参考までに、最近掲載基準が変わったという日本文化人類学会の『文化人類学』の寄稿規定には、「「研究展望」は、文化人類学との関係において、特定のテーマに関わる重要な文献（論文・書籍など）を総説的・批判的にまとめたものを対象としています」（傍点は引用者）、「書評」は、注目すべき新刊書の内容についての簡潔な紹介・

4 *American Anthropologist* 67(1): 209 より。

コメントから（以下略）」（傍点は引用者）と書かれている⁵。前者の「論文・書籍など」という表現が、村津氏のいう「学術書の形式自体をマルチモーダルにしていくこと」を暗に含んでいると考えたら、アブダクションにもほどがあると言われてしまうだろうか。

3 「一緒に」をめぐって

主として拙著の方法の側面に焦点化したリプライとなったが、内容に関する今後の課題を最後に述べておきたい。本書の要にあるのは、これまで「同調」や「共振」などと呼ばれてきた事象について、「主体」や「個体」という前提を一旦とりはずして分節化する試みである。

この試みを突き詰めていくには、本書では敢えて主題化しなかった、語りの意味内容にも踏み込まねばならない。また、「踊り」と「躍り」の峻別をめぐっては、ある事象がいずれかにカテゴライズされるということではなく、1つの事象が展開するなかで「踊り」になったり「躍り」になったりするのではないかと、床呂郁哉氏（AA 研）や野澤豊一氏（富山大学）にも指摘されたことがあり、これも追究すべき課題だ。加えて、本書では少しだけ触れるにとどまったが、「一緒に」を探究するうえで、時間・空間という前提から逃れる必要もある。

本書では ELAN というソフトウェアを使用した分析もおこなったが、本書作成中に実感した ELAN の限界は、少なくとも本書でとりあげた事象を〈私〉から独立したモノとして捉え、観察という視点でのみ分析することが不可能であることを意味している⁶。さまざまな「一緒に」のありようを一度整理し⁷、今後探究していきたいと考えている。

529

<参考文献>

- 古川（＝吉田）優貴 2011 「映像の肉感学」新井一寛・岩谷彩子・葛西賢太編『映像にやどる宗教、宗教をうつす映像』せりか書房、pp.167-185。
- 土田まどか 2018 「書評 吉田優貴著『いつも躍っている子供たち——聾、身体、ケニア』」『文化人類学』83(3):496-498。

5 http://www.jasca.org/publication/jjca/pdf/contribution_rule.pdf より。

6 この文は、表現を多少変えつつ安川一氏（一橋大学）からの本書／本研究に関するメールの文面を拝借したものである。

7 「一緒に」をめぐっては、2018年3月にバリ島でおこなわれた国際ワークショップ「トランスカルチャー状況下における顔・身体」において未整理な状態で発表した。同発表は、報告書『国際ワークショップ トランスカルチャー状況下における顔・身体』（発行：AA 研）に収録されている（<http://coe.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/library/>）。